

藤原瑠璃君

土田龍太郎

源氏物語五十四帖の中にて紫式部の筆先より生ひ出でし男をとこと女をんなそもいくたりぞや。げにおびただしければとみに數へつくしがたきはさてもこそあれ、かかる人々の内まことの名のそれと知らるるはいともわづかにて、源氏の乳母子めのとじより家司となれる惟光もしは匂宮の家人なる時方などさまでしな級高からず下司めきたるものども、あるは千枝常則などいへる繪師のたぐひにほぼかぎられたるは、上臈いみなの諱をあらはに文の表に記すを式部の憚りたるがゆゑにてもぞあるらむ。

世のなべての源氏讀者、光といひ薫といふは光源氏薫大將まさの正しき名乗りなりと思ひなしたるがごとくなれども、まことはさならで、世の人のこれらの君の姿かをりのいみじきをめづるあまり口よ出でし時にとりてのかりの呼名にほかならずやに思はしむるふしあれこれなきにあらず。

さるは桐壺卷の内に源氏君まだいとけなきころのことを述べて
世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御かたちにも、なほにほはしさはたとへんかたなくうつくしげなるを世の人光君と聞ゆ。

といへるところあれど、こはいまだ元服せぬ前まへのことなり。すでに元服し葵上との婚儀すみて間もなきころのこと、さらに後の二條院を世になく造りなせるさまを述べしすゑに光君といふ名は高麗人のめできこえてつけたてまつりけるとぞ云ひつたへたるとなり。と記して同じ巻をとぢめたり。高麗人こまびとの鴻臚館にて相しまゐらせしは、元服には先立る源氏君いまだきびはなるほどにて、この蕃客のつけたてまつれるなる光君といふ名まことの諱なりきとはなかなか思ひがたくなむある。

匂宮卷には

例の世の人は匂兵部卿薫中將と聞きにくく言ひつづけて 云々
と云へるところあれば、匂といひ薫をいふもまよ正しき名乗にはあらで、これまた世の人々の口より出でしかりそめの呼名なるにいたり。

かの鈴屋大人その紫文要領にて、物語の題號のこと述ぶるついでに
光はこの君の諱のやうなり

と云へるは、先に高麗人のめできこえることに因みて、後の元服のをりに光を正ましき名に定めたりけむとこの大人の思ひ定めぬるにもあるべけれど、かかる推し測りなほまことしからぬふしあり。さはれ紫式部、なにとやらむおぼめかしく書きなせるならひここかしこなきにあらねば、光と薫と必ず諱にはあらずとうつたへに斷らむもはた危かるべし。

まことの名のほかにありやなしやはいかにてもあれ、光と呼び薫と呼ぶほかすべなしせば、これら諱なるやいなやあまりかかづらはむもえうなきにいたり。

光源氏のつねにあひ交らひし上達部殿上人、物語の文の上にては諱もて呼ぶべからずとせば、むねと官職位階もてこれぞその人と知らしめむほかすべなし。されど官位つねに同じまなるはまれにて、加階昇進につれて變らであるまじければ、たれにてもあれ一人の上臈につきてその行末をあやまたず辿らむことさしもたやすからねばうたてむつかしき方なきにあらず。

嫌名のならひゆゑにものごとのすぢのややもせば纏れがちになりて解きがたきはいともわづらはしけれど、さはれこの嫌名ひたぶるわろしにもあらず。うちつけに上臈の諱を記さむよりは、もはら時々官位もてまほならでその人とはほはさむこそよしありゆゑづきておぼゆらめかし。

若きより老いぬるまで一期にわたりてあひむつびてやまざりし光源氏の二なき友といひつべきは、おのがいとこにて妻葵上にとりてはせうとなるかの頭中将なることげに否みがたかるべし。この人のこと初て物語に見ゆるは、桐壺巻にて源氏の後見となれりし時の左大臣のことくさぐさ述べりしついでに、

宮の御はらは藏人少將にていと若うをかしきを云々

と記せるところにぞある。ここに宮といへるは桐壺帝の御妹にて葵上と頭中将の御母なるを指せば、光君にとりては御叔母なりといひつべし。この人やがて中将に昇りたりとおぼしくて、次の帚木巻にてかの雨夜の品定めのこと語るに先立ちて

宮ばらの中将はなかにしたしくなれきこえたまひて遊びたはむれをもひとよりは心やすくなれなれしくふるまひたり。

と記せれど、頭中将なるをあらはに示せるは紅葉賀巻にて、ここにてまづ朱雀院の御幸ありしとき源氏中将、大殿の頭中将を片手にして青海波を舞ひけることを述べたり。やがて頭中将の加階ありて正四位下に叙せられたるはこの舞の勸賞なりしなるべし。

いつまで頭中将のままなりしや、定かには知りたけれど、源氏を須磨の浦に訪ひしはすでに三位中将より宰相に経上りてほどなきころなり。その後の加階昇進いともすみやかにてとどこほりなし。あたかも源氏のすぐ後にひたとつきてなり上りゆくがごとくにて、薄雲巻にて權大納言となるほどこそあれ近衛大將を兼ね、乙女巻にては内大臣に任ぜられたり。太政大臣となりてつひに榮耀のはてを究めぬるは藤裏葉巻なれど次の若菜巻の内にていつしか致仕したりしものごとし。

致仕大臣の次子なる按察大納言の右大臣に昇進ありしころのこと語る紅葉巻、初めに

そのころ按察大納言ときこゆるは、故致仕の大臣おとどに次郎なり。

と記せれば、この致仕太政大臣、光源氏のみまかりしにさしもほど經ざるころ世を去りぬることをさを疑ひなし。

この大臣、皇胤にてはあるまじければ、姓は藤原なること物語をひとわたり見るにつれておほかた推し測らるれども、姓をあらはに記せるところとてはさらに見出でがたし。その上の頭中將今の内大臣の姓の藤原なることをおぼろげならずしかと知らしむるは、玉鬘卷の半ばあたりにて右近といへる女房の口より出でし言の葉にてぞある。

雨夜の品定めのをり、頭中將かの夕顔のもとにしのびて幼な子まうけしこと語りたれど、この姫を源氏物語讀者の玉鬘と呼びならはせるは、後に光源氏のことの仔細を聞き知りてふとひとりごちたる

戀ひわたる身はそれなれど玉鬘

いかなるすゑに尋ね聞えむ

てふ一首に因めり。

この玉鬘、母みまかりて後、父中將にあひ見ゆるをりとはさらになく、太宰の少貳を男に持てる乳母めのとらに伴ひて一たびは筑紫まで下りたれど、かしこにてうたて危きことももありて、少貳の一族とまた都に還り上り、心細きままに八幡長谷に詣でつつ日を送りたり。

ここに右近とて昔は夕顔に仕へあたりし女のさるゆかりありて今は紫上に侍ふものありしが、初瀬に詣でしついでにかしこにてゆくりなく玉鬘と乳母らに出で合ひたれば、かたみにかつ驚きかつ喜ぶことひとかたならざりけり。この右近のはからひにて六條院に迎へられし玉鬘、よるべなくさすらへたりし身にひきかへてにはかに源氏にかしづかるるさいはひ人となりけるはめでたきことよなけれど、これまた長谷觀音の利生によれりとせばかしこきことよなしともやいふべからむ。

このとき玉鬘とともにしばし長谷寺に籠らむとせし右近、かの寺のあひ知れる法師を語らひて願文のことなどあつらへむとて云へること左のごとし。

つねのことにて、例の藤原瑠璃君といふが御ために奉るよく祈り申したまへ。その人このごろなむ見たてまつり出でたる。その願もはたしたてまつるべし。

瑠璃とはまことの名なりやはた童名なりやはいかにてもあれ、玉鬘姫とその父なる時の内大臣その上の頭中將の姓の藤原なりをしかと知らしむるはこの右近の詞のほかには尋ぬまじければ、これゆめなほざりに見過すべからず。

さらに行幸卷の一ところに見ゆる藤大納言なる人、玉鬘の父なる内大臣の弟なれば、この一族の藤原氏なることいよいよ疑ひなし。また夕霧と雲居雁とつひに妻夫めをととなるころのことくさぐさ語る卷の名、内大臣のふと口ずさめる古き歌に因みて藤裏葉といへれど、ここに藤原一門の行末を壽ことほぐ意こころみをこめたるにてもやあるらむ。

源氏物語の内にては、源氏の藤氏にやや勝りたりやに見ゆれども、されどおほかたは兩氏あひ竝ならびて政せいにあづかりたりといふをうべし。關白せんのうまた内覽ないらんなる文字はいづくにも見えねど、藤氏攝政のあとたえてなきにしもあらぬこと濔標卷にてぞ伺ひ知るべし。この卷にて朱雀院より冷泉院に御讓位ありしとき、源氏は内大臣に昇りたれど攝政のことは舅なる致仕左大臣に譲らむとはかりしことあり。このとき致仕大臣初めは肯うけがはざりしかどもえずまひはてでつひに攝政太政大臣となりて、薄雲卷の内にて身まかりぬるまでいまだ稚わかき主上の御後見を務めたり。

かの忠仁公昭宣公に始まりて、紫式部の物語の筆をとりしころほひにまさに盛りのはてを極めたる藤氏專權、今の世にては攝關政治と呼びならはせれど、濔標卷の書きざまより伺はるる攝政太政大臣の冷泉院に仕へまつりしさま、うつつの世にありしいはゆる攝關政治とおもむきいたく異りたり。されば物語の内に藤氏攝政のためしこそなきにあらね、藤氏專權のあととてはさらに見出でがたきなり。

光源氏のいとこなるかの頭中將、いとも親しき友にてありしはさることなれども、ややもすれば源氏とあひ競はむとけしきはむをりもありて、紅葉賀卷にては、この中將はさらにおしけたれきこえじとはかなきことにつけても思ひいどみきこえたまふ、

と記せるは、藤氏大臣の嫡子なればさすが思ひ上れるところなきにあらざりしがゆゑにてもあるべし。ことには冷泉院の御妃かたがたありしが内に、弘徽殿女御と聞えしは藤氏大臣の御娘なりしかど、これにむかへて前齋宮なる秋好中宮の御後見たりしは源氏にほかならねば、四季の御遊びなど雅たるかたにつけて、藤氏と源氏とあひきしらふやに見ゆることなきにあらざりけれめども、これまたさがたきわざなりとぞいひつべき。

紫式部の筆の公おほやけさまのことに及ぶはいとまれなれば、政まつりの廷にはにて源氏といとこなる藤氏大臣とのなべての仲らひまことはいかがなりしや、とみには推し測りがたし。かたみに心おくことたえてなかりしにはあらざるめれど、ゆゆしき諍しやうひに至りしことありたりとははた思はれず。さればはては太政大臣に經上りしいところなる頭中將、つひに光源氏の二なき友のままにて一期を終へたりとおほしければ、いともめでたしとばかり云ひてこそやみぬべけれ。

註釋家の論^{あげつら}へる源氏物語の准據といふこと、さらにあとなきよしのごとのみにては
あらざるめれど、今は深く考へでもありなむ。この物語、まことに在りし御世のこと書き
記せるにてはつゆあらず。うつつにはなかりし源氏藤氏のあるいはあひ睦^むびまたはあひ競
ひて主上を輔けまゐらせつつ、ともに時めき榮えしさまを紫式部の心に浮かぶままおのが
好むにまかせて綴りなしものなれば、これぞまさしき作り物語にほかなきなり。

(令和六年七月二十二日受附)